

悠紀の里 2025.10.19 ゆきファミリーパーク

●総来場者数 818名  
●協働先 ゆきファミリーパーク実行委員会  
○当日に向けて、①子育て支援交流会 ②広報物(団体紹介冊子やポスターなど)制作日を設け、事前に参加団体同士の相互理解と連携を深めました。当日は20団体が参加し、体験ブース、展示、販売、ステージ企画など多彩な内容を展開しました。「みんなのむつみ展」(保育園児の作品展示)を同時開催したことにより、多くの家族連れで会場は終日にぎわいをみせました。岡崎女子大学による幼児向けブース、キッチンカーによる飲食販売の充実など、子どもから大人まで楽しめる環境を整えた結果、来場者の滞在時間も長くなり、子育て支援活動の認知向上と参加団体・来場者双方の交流促進につながりました。



よりなん 2025.12.9 市民活動サポート研修 情報ひろば活用講座

●総来場者数 34名  
●協働先 岡崎おもちゃ病院、市民活動センター  
○情報ひろばを未活用の市民活動団体を対象に、団体活動の周知と市民活動の活性化を目的とした講座を実施しました。事前にログイン方法の確認や掲載準備を個別に支援し、当日は①「岡崎おもちゃ病院」による事例発表②デモンストレーション形式による演習を行いました。参加者の多くはパソコン操作に不慣れな方でしたが、スタッフのフォローを受けながら自団体のトップページを作成できました。講座内で実際に公開まで行ったため、目に見える成果が得られ、高評価につながりました。講座後には写真や動画の掲載に挑戦するなど、広報力アップの意欲向上に結びつきました。また、一連の対応を通し、参加者とスタッフ間に新しい連携が生まれる機会にもなりました。



りた職員の思いを伝える！コラム

登山もまちづくりも“継続は力なり”

昨年11月、1泊2日で初めて北アルプスの雪山登山に挑戦しました。1日目はあいにくの空模様で、楽しみにしていた景色はまったく見えず、途中から吹雪に変わり視界はどんどん悪くなり、体の芯まで冷えるような厳しい山行になりました。急な斜面が続く区間では、積もった雪に足が沈み、一歩進むだけでも体力を奪われます。そんな中で私を支えてくれたのは、「一歩(分)歩けば、一歩(分)進む」という、ほとんど呪文のように繰り返していた言葉でした。あのときの歩みは、私たちが日々向き合うまちづくりや市民活動にも重なります。すぐに結果が見えなくても、誰かの一歩が、次の誰かの一歩を生む。そんな積み重ねが地域の未来を形づくっていくのだと思います。小さな一歩が重なれば景色は必ず変わっていく。あの急登で感じた“前へ進む力”をこれからのまちづくりに重ねながら、地域の歩みをそと支えていきたいと思ひます。



▲2日目、快晴の燕岳

阪口奈央(むらさきかんセンター長)

犬山生まれ、岡崎育ち。温泉と生ビールが登山後の楽しみです。今年は檜ヶ岳に登るのが目標の1つです。今年も、いろんな山にたくさん登りたい！

お問合せ	よりなん	59-3600	むらさきかん	66-3066	市民活動センター	23-3114
なごみん	やはぎかん	33-3665	悠紀の里	57-5050	まち育て推進チーム	23-2888

まちのミカタ

Litaracy

2026.3 vol.138

発行・編集



特定非営利活動法人 岡崎まち育てセンター・Lita

〒444-0031 愛知県岡崎市梅園町3丁目6-6  
TEL(0564)23-2888/FAX(0564)23-2898  
http://www.okazaki-lita.com/  
https://www.facebook.com/okazaki.lita/

配布

岡崎市図書館交流プラザ・Libra/岡崎市内の地域交流センター  
会員宛へ郵送 等 ※会員登録をご希望の方は左記までご連絡ください。

配布協力

岡崎市役所各支所/岡崎市各市民センター/シビックセンター/  
FMおがさき/杉くんの駄菓子屋/松應寺/cafeくらがり/

まちのミカタ

Litaracy ーりたらしいー

138

2026年3月



6つのテーマに分かれて意見交換



子ども同伴で参加できるようにキッズスペースで託児対応しました



\*プライバシーに配慮して生成AIで写真を加工しています

集合写真 | 井戸端会議会場となった恵田小図工室にて

特集

大切な故郷を未来につなぐ

恵田学区の挑戦

岡崎市域の約6割を占める中山間地域。豊かな水源の森や田畑が広がる一方で、人口減少や少子高齢化は深刻さを増し、地域の環境維持が大きな課題となっています。こうした状況に対応するため、市は2022年に「岡崎市中間地域活性化計画～オクオカイノベーションプラン2030～」を策定。市内12学区を「オクオカイ」と位置づけ、それぞれの強みを活かした持続可能な地域づくりを推進しています。

その「オクオカイ」の一つである恵田学区では、2022年

に「恵田学区地域活性化対策委員会(通称:久楽志隊)」が発足。大切な故郷をより良い形で次世代へつなぐための活動が始まりました。

りたではこれまで、下山学区をはじめとするオクオカイの支援に携わってきましたが(本誌No.114, 127参照)、今年度からはここ恵田学区にて、地域一丸となった「計画づくり」と「活動づくり」の伴走支援を行っています。

本号では、その熱気あふれる取り組みの概略をご紹介します。

# 大切な故郷を未来につなぐ 恵田学区の挑戦

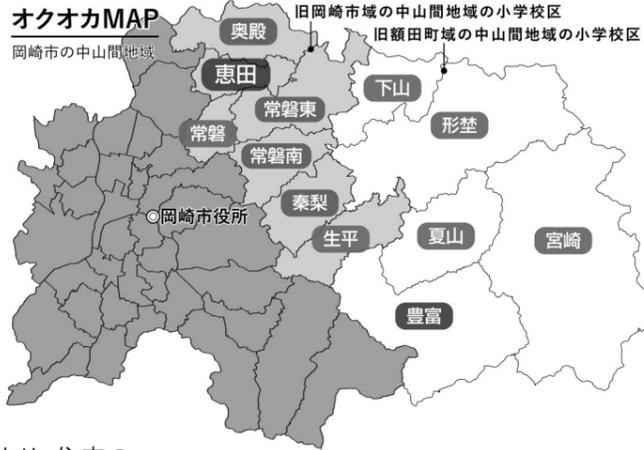
## 恵田学区の概要

自然豊かで起伏に富んだ里山に囲まれた恵田学区。人口は900人強で、47学区中4番目に少ない規模ですが、駒立町のぶどう狩りや恵田小学校の「落ち葉スキー」など、市内外に広く知られる地域資源を有しています。

1990年代後半、人口減少に伴い恵田小の児童数は40人台まで減少しました。一時は小学校の存続が危ぶまれましたが、2000年に造成された「ライクタウン花園(140戸強の新興住宅地)」が学区に編入されたことで、児童数は一時期160名を超えるまでに回復します。しかし、それから20年余りが経過した現在、再び児童数は40人台へと戻ってしまいました。

恵田学区はほぼ全域が「市街化調整区域」に指定されており、住宅の再建築や子世帯の新築に一定の制限があります。そのため、市街化区域と比較して人口が流出しやすい状況にあります。こうした人口減少や児童数の低下に歯止めをかけ、学校の存続と地域活性化のために立ち上がったのが「久楽志隊」でした。

久楽志隊は、増加傾向にある遊休農地を活用して、地域外の関係人口創出を図る稲作体験プログラム「丹坂米そだて隊」など、地域で出来ることを行いながら、地域の实情に応じた土地利用の実現を図る「集落維持計画」の策定を視野に入れて活動しています。



▲丹坂米そだて隊の様子(写真提供:久楽志隊)

## 「恵田学区みんなのアンケート」の実施

りたは、岡崎市中山間政策課より委託を受け、昨年7月から久楽志隊との協議を開始しました。まずは住民の皆さんの本音や、地域に眠る課題・資源を把握するため、中学生以上の全住民を対象としたアンケート調査を実施。久楽志隊と恵田学区総代会の尽力により、回答率は78.3%という非常に高い数字を記録し、地域への関心の高さが改めて浮き彫りとなる結果となりました。

この調査からは、遊休不動産の実態や、将来的なUターンの可能性を秘めた出身者の存在、そして老後の移動手段に対する不安などが可視化されました。一方で、「地域のために何か協力したい」と考えている方が少なくないことも判明しました。

## 恵田学区の未来を考える井戸端会議

1月25日、今後地域としてどのような活動を展開していくべきかを考えるワークショップ「恵田学区の未来を考える井戸端会議」を開催しました(主催:久楽志隊、共催:恵田学区総代会・岡崎市、企画・運営:りた、運営協力:ONE RIVER)。会場となった恵田小学校の図工室には、老若男女61名の多彩な顔ぶれが集まり、熱のこもった語らいの場となりました。

冒頭では地域主体の活動事例として、りたが携わった「松應寺横丁」の関係人口を増やす秘訣や、岡崎学区の「ムリなく、ムダなく、ムラなく」を合言葉にした持続可能な地域運営の姿勢(よりなん「町内会サミット」より)を紹介しました。

続くグループワークでは、アンケート結果等を踏まえた6つのテーマ(A.交流イベント、B.農用地保全、C.移住促進、D.小学校連携、E.困りごと解消、F.次世代)を設定。久楽志隊メンバーが各テーブルのホスト、りたとONE RIVERスタッフがファシリテーターを務め、参加者が関心のあるテーマを渡り歩く「ワールドカフェ形式」で意見を交わしました。

各グループからの報告では、「移住・空き家相談窓口」や「空きたんぼバンク」の設置、さらには「落ち葉スキー体験会」や「盆踊りの復活」など、具体的かつ前向きな提案が次々と飛び出しました。地域の未来を自分たちの手で描こうとする、確かな熱量を感じる一日となりました。

アンケートに寄せられた切実な声、井戸端会議で生まれた前向きなアイデア。そして何より、皆さんの「故郷を想う気持ち」は、地域を動かす大きな力となります。りたはこれからも、恵田学区の皆さんが描く未来に近づけるよう、共に歩んでいきたいと思ひます。

## ●調査概要

- [実施時期] 2025年9月24日～10月11日
- [対象] 中学生以上の恵田学区住民+出身者
- [回答数] 714(学区内669+学区外45)
- [回答率] 78.25%(対象人数855として)
- [質問項目] ①基礎情報(属性)
  - ②居住地としての恵田学区について
  - ③恵田小学校について
  - ④遊休不動産について
  - ⑤集落維持制度の是非について
  - ⑥今後の取組について

## まち育てレポート

## QURUWA福祉&防災フェア

### ● QURUWA7町・広域連合会×岡崎JCの協働マッチング

10月18日、岡崎城公園多目的広場にて「QURUWA福祉&防災フェア」が開催されました(主催:同実行委員会)。実行委員長の佐藤 伸さんは、岡崎青年会議所(以下、岡崎JC)の理事長時代(2023年)にりたの理事を務めており、当時からJCのネットワークを活かした地域防災の構想を描いていました。そこで、以前より同フェアを通じて啓発活動に取り組んでいた「QURUWA7町・広域連合会」を紹介したところ、今回から岡崎JCが全面的に企画・運営をサポートする運びとなりました。

これまでの地域包括支援センターや消防本部、女性防災クラブ等との連携に加え、今回は耐震改修を推進する住環境政策課や、ペット防災を啓発する動物総合センターAnimoなど、新規参画を含む計16団体が集結。これまで以上に充実したプログラムとなりました。

### ●いつ、どこで被災するか、非日常にも思いを巡らす

りたは今回、防災意識アンケートの企画・運営と、メインイベントの一つ「防災討論会」の進行を担いました。討論会では、市防災課や消防本部、公園管理者である岡崎パブリックサービス等の担当者が登壇。公助の限界と、自助・共助の重要性について理解を深めました。特に「今、この場で発災したら？」というテーマトークでは、土地勘のない外出先で被災する可能性に触れ、外出時の備えの必要性を再確認する貴重な機会となりました。

アンケート結果からは、QURUWA地域の住民の自助意識が他地域より高いことが伺えましたが、備えに「十分」はありません。震災のみならず水害リスクも高まる中、今後も継続して防災啓発に力を入れていきたいと思ひます。



▲防災討論会の様子



## りた's Eye

当日、討論会に先立ち、来場者の防災意識を調査する「シールアンケート」を実施しました。設問は既存の調査から抜粋して設計し、地域住民の意識を客観的に比較・分析できるようにしています。

また、アンケート結果をその後の討論会で即座に共有・引用することで、参加者が自分事として関心を持てるよう工夫しました。

## Topics

### むらさきかん防災交流会 「防災フェーズフリーってナニ？」

皆さんは「フェーズフリー」をご存じですか。「日常時」と「非常時(災害時)」の境をなくし、普段の生活で便利なモノやサービスを、もしもの時にも役立てようとする新しい防災の考え方です。

むらさきかんでは、市民活動団体等の連携や地域のつながりの重要性を広めるため、1月24日に市民活動団体や防災関係者、市民が集う防災交流会「防災フェーズフリーってナニ？」を開催しました。

はじめに岡崎市防災課からフェーズフリーの考え方や具体例などの紹介があり、その後、活動にフェーズフリーを取り入れている2団体による事例発表が行われました。日本ボーイスカウト岡崎第11団による「災害時に役に立つ」ロープワークのレクチャーでは、参加者同士が実践し学び合う様子が見られました。

グループワークでは、普段の活動や個々が持つスキルについて情報交換された一方で、「防災訓練に若者が来ない」という現状は、地域に共通する課題であるということが改めて認識されました。

交流を通じて、分野や立場を越えたつながりの大切さや、日常の活動が非常時の支えになることへの気づき生まれ、顔の見える関係性が行動力につながることを実感する場となりました。本交流会をきっかけに、フェーズフリーの考え方を取り入れた地域づくりが今後さらに広がることを期待されます。



▲同時開催した展示ブースで説明を受ける参加者